

小西 甚一 編

比較思想叢書
文化

文学概念の変遷

国書刊行会

比較思想・文化叢書 文学概念の変遷

昭和52年10月10日 印刷

昭和52年10月15日 発行

定価 2,200円

編者 小西 甚一

発行者 佐藤今朝夫

制作・花塚 悟

〒170 東京都豊島区巢鴨 3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 印刷・セイユウ写真印刷㈱ 製本・青木製本

序

二十一世紀を志向する先導的かつ実験的な新構想大学として筑波大学が発足してから、早くも第四年を迎える。新構想は、研究・教育・厚生補導・管理体制その他、さまざまな面で推進されているが、教育の面でいうと、学部・学科制を廃止し、学群・学類制をうち建てたのが、筑波大学における重要な特色のひとつである。

学士段階の教育は、学群においてなされるが、いまのところ第一学群・第二学群・第三学群・芸術専門学群・体育専門学群・医学専門学群が活動している。特別なカリキュラムをもつ専門学群に対し、第一ないし第三の学群は、それぞれ小型の総合大学であり、それぞれが人文・社会・自然に対応する学類をもつ。第二学群でいうと、比較文化・人間・生物・農林の四学類から成るが、学類はかならずしも小型学部ではなく、実質はカリキュラムの集合体である。たとえば、比較文化学類は、比較文学・比較地域文化・現代思想の三コースから成るが、これらのコースは、学科の下位区分としての専攻を意味するものではなく、この学類で勉強する学生が、主としてどのような分野の授業に出席するかを示す指標にすぎない。

従来の大学では、日本文学専攻とか東洋倫理学専攻とかいう仕切りがあって、学生はその仕切りの

中へ連れこまれ、そこにあらかじめ設けられている履修規程に従って単位を取得させられる。筑波大学の学類では、そのような仕切りはない。あるのは、日本文学の分野に属する授業の束とか東洋倫理学の方面に関する授業の束とかだけである。学生諸君は、自分の志望する進路により、それら授業科目群の中から適当なものを自分で選び、自分で作ったカリキュラムで勉強し、卒業してゆく。

たとえば、卒業論文を日本文学の分野で書くようにする学生でも、志望する進路は、国語の教員になろうとする者、ジャーナリズムで活躍しようとする者、大学院へ進み日本文学専門の研究者になろうとする者など、いろいろあるはずだが、従来の大学では、それらの学生に対し、唯一種類のカリキュラムを課したのである。しかし、国語の教員になろうとすれば、古文・現代文・文法・漢文などにわたり、ある程度まで平均した基礎学力が必要となる。日本文学の専門学者になるつもりならば、古代文学で多くの単位を取り、卒業研究は『万葉集』巻十六だけに集中してもよいけれど、国語の教員はそういうわけにゆかない。古文・現代文・文法・漢文と、ひとわたり皆こなすとなれば、古文ひとつを採っても、古代文学だけに専念した学生にくらべ、専門性は低いにちがいない。しかし、プロの国語教員とは、そういうものであって、プロ意識に徹すれば、何も『万葉集』について独創的な研究をしないからといって、気にすることはない。また、ジャーナリズム志望の学生なら、古文などは勉強しなくても、近代日本文学を六割、社会学を四割ぐらい勉強して、卒業論文にたとえば「明治期小説における家族アーキタイプ」といった類の題目を選ぶことも可能であろう。

筑波大学へおいでになると判るが、われわれのキャンパスには門も塀もない。開かれた大学だ。建

物の中には壁があるけれど、学群とか学類とかを建物にたとえるならば、そこには壁がなく、あるのはせいぜいカーテンである。従来の大学では、日本文学専攻の学生と英文学専攻の学生とが自由に交流し、明治期における自然主義の問題を題目とするセミナーを結成するなど、とうてい考えられなかったろう。まして、思想史学・史学の教授と地理学の教授とが寄り合つて比較地域文化というコースを設定することは、とうてい想像もできなかったといふべきだろう。しかし、それが筑波大学における比較文化学類の実態なのである。

このような教育体制は、まさに二十一世紀人の育成を約束するものだと思うけれども、それが達成されるためには、なお少なからぬ困難がある。それは、この新しい体制を三年間にわたり実行してみた現在の時点で、いっそう強く感じられる困難である。さまざまな専門の教授たちが智慧を出しあつて総合的な分野を開拓するという理想は理想として、現に授業を担当している教授たちが自分の専門を超え、広い分野を結合してゆく知見は、放っておけば、とうてい生まれるものでない。悪くすると、バラバラの知識が雑然と寄り集まったコースになる心配があり、教授たちは非常勤講師の集団と同じような意識をもちかねない。また、学生の側としても、気の向いた授業だけつまみ喰いをして一二四単位を充足したけれど、何の専攻ですかと訊かれたとき、専攻なしという専攻ですなど答えかねないような卒業生が出るのでは困る。

そこで、授業の裏づけとなるような研究をいつも学類の人たちが実行しており、その研究に基づいた授業がなされることが、特に比較文化学類とか修士の地域研究・環境科学などの研究科では必要と

なる。この論集は、そういった必要に迫られた比較文化学類の教官有志が「文学とは何か」という課題で一連のセミナーを設けた成果のひとつである。これだけ違った分野の学者たちが共通の課題で何かを追求めてゆくプロセスの中から、従来の日本文学とかドイツ文学とかの領域だけで付き合っていた研究からは得られないものが出てくるはずである。そのような研究があつてこそ、比較文化学類としての授業も生まれるのである。比較文化の「比較」とは、単に比べる意味ではなく、研究なり授業なりを世界的な視野のもとにどっしり据えてゆくための「広さ」だと申したい。

一九七七年九月

本書の目的

筑波大学は、新設の大学であることの利点を十分に生かして、今までの大学では行なわなかった、あるいは行なえなかった、いろいろな新しい試みを、学問のそろそろの分野や大学の組織に関して実行している。研究者たる教官が、従来の学部とは違う学系に所属するというのもその一つであり、本書に名を連ねている者は「文芸・言語学系」所属の教官たちである。学生も、従来の学部よりは遙かに総合的・学際的な学類に所属している。その学類の一つに「比較文化学類」というのがあって、これは文学、地域文化、現代思想などを専攻する所であるが、そこに、各国文学、比較文学の他に「一般文学」というコースが開設されている。また大学院博士課程の文芸・言語研究科にも、各国文学や言語学の他に「文学」専攻というコースが設けられている。これらはいずれも、ある一国の文学、あるいはある特定の作家の作品を研究するのではなく、もっと広く、およそ文学という営みは人間にとって何であるのかを問うことを目標としている。当然のことながら、文学活動に理論的根拠を与えること、文学のいろいろのジャンルの、あるいは創作上のいろいろの方法についての理論的研究を行なうこと、批評とは何をどうすることか、あるいは批評と文学研究の関係如何、というようなことが主要な問題となる。

そうは言っても、作品を離れて文学というものが有り得るはずはなく、作品はつねにある特定の国の、特定の時代の、特定の作家によって作られるが故に、我々の研究も、個々の作品をいい加減にしておいて理屈ばかり論じても仕方がないことは当然である。いろいろな作品を浅く広く読んだだけで何を論じて、それでは恐らく研究の名に値しないものしか生れないであろう。従って我々には、一方ではあくまでも厳密に作品を読んで、それに即して議論を展開すると同時に、他方つねに広い視野を保ち、文学への根本的な間いかけを絶えず行いつづけるという、殆ど不可能とも思える要求がなされていることになる。比較文学というもののさえ、もし一人の学者がそれを行なうとするならば、恐らくは読む技術と文学的感覚の両面において天才的な能力の所有者であることを必要とするものであるう。

ここで我々の「学系」という組織が生きる。それは従来の学部以上に専門に密着し、かつ同時に学際的でもあるので、平常の我々の所屬場所そのものが研究組織となり得る。我々はすでにいずれかの文学の研究者である。ある者は国文学の、ある者は近代日本文学の、ある者は中国文学の、ある者はイギリスの、ある者はアメリカの、またある者はフランスの、そしてさらにある者はギリシア・ローマ文学の研究者である。こういう我々が、一定期間共通のテーマで研究を進めれば、殊更に共同研究のチームを組むまでもなく、ある程度の成果は期待できるはずである。我々はそう考えた。

まず手始めに、いろいろな国、いろいろな時代で、文学というものがどういうものと考えられていたか、つまりどういう文学の概念があったかを知っておいた方がよいと考えて、月一回の研究会を開

くことにした。当番を決めて、各人の分野における状況を報告し、その都度全員で質疑討論をした。以下に収めるのは、その研究会で行われた報告である。もちろんこれだけで世界の文学を網羅してはいないし、現に我々の研究会は今も続行中である。また報告だけでなく、討議をも収めた方がもっと面白い本が出来たかも知れないが、紙幅を考えて残念ながらそれは割愛した。

しかし我々はこれでもよいと考えている。報告は報告であつて研究発表や論考とは違ふが、その点もそれでよかつたと考えている。これは無論我々が安易なことで満足したということではない。毎月の報告会のたびに、我々一人一人が何か一つや二つは驚きを以て聞くことがあつた、なるほど附に落ちる話があつたことに満足した、ということなのである。以下の各報告はそれぞれの専門分野ですでに常識に属することが多いかも知れない。専門家でなくても、この程度のことなら知っていると云われるかも知れない。君たちは今頃ようやくこんなことを合点したり、この期に及んでこんなことにいちいち驚いたのかと逆に驚かれるかも知れない。しかし問題は、その知り方にある。知識とそうでないものを混同すること、本当には分っていないのに分つたつもりになることは甚だ容易なことだからである。だから、何事についても簡単に、それは常識だ、と言う人の常識を我々は信用することができないし、逆に、各報告に我々が驚いたり感心することができたのは、我々が研究者としては健康なしるしだと考えて満足したのである。

この報告会はまだ続くが、その後の計画も我々は一応考えている。相変らず大きなテーマだがもっと各論的な問題、例えば、詩とは何かについての共時的な研究、あるいは歴史的研究、詩におけるイ

ンスピレーションと技術の関わり合い、という古くからの問題もある。散文も文だと認められるようになった事情を問うてもよいし、散文におけるリズムの問題というのもある。演劇と劇的ということの再検討をしてもよいだろうし、芝居の科白は話しことばなのか書きことばなのかと問うのもよいだろう。その他、プロットだの、アイロニーだの、あるいは比喻だの、大事な問題は山ほどある。これらを順次に、しかしできるだけ体系的に取り上げて行こうと我々は考えている。そうすることによって我々が、少しでも文学研究に貢献できることを祈っている。

昭和五十二年八月

柳 沼 重 剛

文学概念の変遷

■目次

文学概念の変遷……………小西甚一編……………9

序……………小西 甚一

本書の目的……………柳沼 重剛

第一章 古典古代における文学の概念……………柳沼 重剛……………15

第二章 エリザベス朝における文学の概念……………富原 芳彰……………43
——シドニーの『詩の弁護』による——

第三章 中世的豊饒としての文学概念……………奥野 純一……………73

第四章 中国における小説概念の成立と推移……………内山 知也……………105
——文言小説を中心として——

第五章 クロワツセの夢……………川口 喬一……………133
——イギリス文学にとってモダニズムは何であったか——

第六章	ポストモダニズムの意識……………	岩元巖……………	161
-----	------------------	----------	-----

——アメリカ文学の場合——

第七章	イギリス・ロマン派における文学の概念……………	藤平武昭……………	181
-----	-------------------------	-----------	-----

——「過程」としての詩と詩論——

第八章	文学は芸術か……………	赤祖父哲二……………	207
-----	-------------	------------	-----

——ロマン主義の果てに——

あとがき

文学概念の変遷

